ボッコちゃん

そのロボットは、うまくできていた。女のロボットだった。人工的なものだから、いくらでも美人につくれた。あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人ができあがった。もっとも、少しつんとしていた。だが、つんとしていることは、美人の条件なのだった。

ほかにはロボットを作ろうなんて、だれも考えなかった。人間と同じに働くロボットを作るのは、むだな話だ。そんなものを作る費用があれば、もっと能率のいい機械ができたし、やとわれたがっている人間は、いくらもいたのだから。

それは道楽で作られた。作ったのは、バーのマスターだった。バーのマスターというものは、家に帰れば酒など飲む気にならない。彼にとっては、酒なんかは商売道具で、自分で飲むものとは思えなかった。金は酔っぱらいたちがもうけさせてくれるし、時間もあるし、それでロボットを作ったのだ。まったくの趣味だった。

趣味だったからこそ、精巧な美人ができたのだ。本物そっくりの肌ざわりで、見わけがつかなかった。むしろ、見たところでは、そのへんの本物以上にちがいない。

しかし、頭はからっぽに近かった。彼もそこまでは、手がまわらない。簡単なうけ答えが

できるだけだし、動作のほうも、酒を飲むことだけだった。

彼は、それが出来あがると、バーにおいた。そのバーにはテーブルの席もあったけれど、ロボットはカウンターのなかにおかれた。ぼろを出しては困るからだった。

お客は新しい女の子が入ったので、いちおう声をかけた。名前と年齢を聞かれた時だけはちゃんと答えたが、あとはだめだった。それでも、ロボットと気がつくものはいなかった。

「名前は」

「ボッコちゃん」

「としは」

「まだ若いのよ」

「いくつなんだい」

「まだ若いのよ」

「だからさ……」

「まだ若いのよ」

この店のお客は上品なのが多いので、だれも、これ以上は聞かなかった。

「きれいな服だね」

「きれいな服でしょ」

「なにが好きなんだい」

「なにが好きかしら」
「ジンフィーズ飲むかい」
「ジンフィーズ飲むわ」
酒はいくらでも飲んだ。そのうえ、酔わなかった。
美人で若くて、つんとしていて、答えがそっけない。お客は聞き伝えてこの店に集った。
ボッコちゃんを相手に話をし、酒を飲み、ボッコちゃんにも飲ませた。
「お客のなかで、だれが好きだい」
「だれが好きかしら」
「ぼくを好きかい」
「あなたが好きだわ」
「こんど映画へでも行こう」
「映画へでも行きましょうか」
「いつにしよう」
答えられない時には信号が伝わって、マスターがとんでくる。
「お客さん、あんまりからかっちゃあ、いけませんよ」
と言えば、たいていつじつまがあって、お客はにが笑いして話をやめる。
マスターは時どきしゃがんで、足の方のプラスチック管から酒を回収し、お客に飲ませた。

だが、お客は気がつかなかった。若いのにしっかりした子だ。べたべたおせじを言わないし、飲んでも乱れない。そんなわけで、ますます人気が出て、立ち寄る者がふえていった。
そのなかに、ひとりの青年がいた。ボッコちゃんに熱をあげ、通いつめていたが、いつも、もう少しという感じで、恋心はかえって高まっていった。そのため、勘定がたまって支払いに困り、とうとう家の金を持ち出そうとして、父親にこっぴどく怒られてしまったのだ。
「もう二度と行くな。この金で払ってこい。だが、これで終りだぞ」
彼は、その支払いにバーに来た。今晩で終りと思って、自分でも飲んだし、お別れのしるしといって、ボッコちゃんにもたくさん飲ませた。
「もう来られないんだ」
「もう来られないの」
「悲しいかい」
「悲しいわ」
「本当はそうじゃないんだろう」
「本当はそうじゃないの」
「きみぐらい冷たい人はいないね」
「あたしぐらい冷たい人はいないの」
「殺してやろうか」

「殺してちょうだい」
彼はポケットから薬の包みを出して、グラスに入れ、ボッコちゃんの前に押しやった。
「飲むかい」
「飲むわ」
彼の見つめている前で、ボッコちゃんは飲んだ。
彼は「勝手に死んだらいいさ」と言い、「勝手に死ぬわ」の声を背に、マスターに金を渡して、そとに出た。夜はふけていた。
マスターは青年がドアから出ると、残ったお客に声をかけた。
「これから、わたしがおごりますから、みなさん大いに飲んで下さい」
おごりますといっても、プラスチックの管から出した酒を飲ませるお客が、もう来そうもないからだった。
「わーい」
「いいぞ、いいぞ」
お客も店の子も、乾杯しあった。マスターもカウンターのなかで、グラスをちょっと上げてほした。

その夜、バーはおそくまで灯がついていた。ラジオは音楽を流しつづけていた。しかし、

だれひとり帰りもしないのに、人声だけは絶えていた。
そのうち、ラジオも「おやすみなさい」と言って、音を出すのをやめた。ボッコちゃんは「おやすみなさい」とつぶやいて、つぎはだれが話しかけてくるかしらと、つんとした顔で待っていた。